

フルトヴェングラー・センター® *The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan*

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1 October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

会報第 75 号 2026 年 6 月 / Newsletter No. 75, June 2026

フルトヴェングラー・センター会員の皆様、

会報を何やら戦争の話ばかりで始めるのは気が滅入りますが、2つのうちの一つはどうやら収束に向かいつつあるかのように見えるのがわずかな救いです。ここで、カラヤンの話題が出ることはあまりありませんが、彼が唯一ウィーン・フィルのニューイヤーコンサートを 1987 年に指揮した際の短いスピーチの最後に“Friede, Friede und nochmal Friede!”（平和を、平和を、もう一度平和を）と述べた時からすでに 39 年。我々がフルトヴェングラーの人生や音楽も戦争さえなければどのようになっていただろうと思いを巡らすこの頃です。一方で若き天才ヴァイオリニスト HIMARI さんやピアノの天才藤田真央さんのキラキラした才能や活躍などワクワクして目が離せません。

諸般の事情から発行が遅れて申し訳ございませんでしたが、会報 75 号は次のような内容でお届けします：

目次

- | | |
|--|------------|
| 1. フルトヴェングラー研究資料： フルトヴェングラーのインタビュー | P. 2 - 5 |
| 2. 新譜頒布のご案内 | P. 6 - 9 |
| 3. 第 107 回レクチャー・コンサートのご報告（中村匠一）と頒布資料について | P. 10 - 15 |
| 4. センター既発盤へのご感想 | P. 16 - 18 |
| ヘニング・スミット（オルセン）氏
林 伸司（Shin-P）氏 | |
| 5. フランス・フルトヴェングラー協会の新譜（配信のみ）について | P. 18 |
| 6. 第 108/109 回レクチャー・コンサートのご案内 | P. 19 |

フルトヴェングラーのインタビュー(多分…本邦初公開)

これまで知られていなかったフルトヴェングラーのインタビューがドイツの公共放送 WDR (Westdeutscher Rundfunk Köln ケルン西ドイツ放送局)によって、インターネットで公表されました。このインタビュー録音は 1950 年 6 月 6 日に行われたとされ、「完全ディスコグラフィー2024 年版」にも記載がなく、おそらく本邦初公開となると思われます。

このインタビューで興味深い点はそのタイミングです。

当時のフルトヴェングラーの演奏会記録を見ると、1950 年 3 月 2 日～4 月 6 日までミラノ・スカラ座で「ニーベルングの指環」を 3 チクルス公演、4 月 14-24 日は南米ブエノス・アイレスでコロン劇場管弦楽団を指揮して 11 回の演奏会(4 月 29 日、5 月 2 日の《マタイ受難曲》センター既刊 WFHC-006 を含む)を行い、その後 5 月 22 日にロンドンでフィルハーモニアを指揮してシュトラウスの《4 つの最後の歌》の世界初演などを行いました。

5 月 24 日からはベルリン・フィルとの演奏旅行がスタート: ヴィースバーデン、フランクフルト、ミュンヘン、シュトゥットガルトの 4 都市を周り、続いてスイスに移動、モントルー、ローザンヌ、ジュネーブ、ベルン、バーゼルを経て、6 月 3 日/4 日の 2 日間でパリ公演を行いました。その翌々日の 6 月 6 日に西ドイツのケルンでの演奏会に向けて列車移動、列車が 1 時間延着した 6 月 6 日当日ケルン中央駅で行われたインタビューの録音です。



内容的にもその日に至る演奏会などについて言及があり、就中ロンドンでのシュトラウスの《4 つの最後の歌》の初演についてのコメントなど極めて興味深いものがあります。

センターでこれを聴き取り、テキスト化した上で日本語訳しましたので、以下にご紹介いたします。

なお実際の音声は左に掲げる QR コードをスマホなどで読み取るか、パソコンでは次の URL から聴くことができます。

<https://www.ardsounds.de/episode/urn:ard:episode:68a351f9a606b207/>

Interview mit dem Dirigenten Wilhelm Furtwängler

WDR Retro - Kultur in NRW · 07.06.1950 · 3 Min.

Wilhelm Furtwängler (1886-1954) war einer der bedeutendsten Dirigenten des 20. Jahrhunderts. Der WDR-Reporter Bernhard Ernst trifft ihn am Kölner Hauptbahnhof auf der Durchreise und spricht mit ihm über seine Konzerttournee.

[ARD, WDR Retro. Aus den Audioarchiven.]

Bernhard Ernst: Kein Eingang steht vor der Tür im Kölner Hauptbahnhof, aber wenn man eine Stunde Verspätung hat, so eilig ist und Dr. Wilhelm Furtwängler heißt, dann darf man auch in diesen Raum, der sonst den gewöhnlichen Sterblichen verschlossen ist.

Herr Dr. Furtwängler, Sie kommen gerade aus Paris. die Eindrücke, die Sie in Paris haben von Ihren beiden Konzerten, würden uns nun doch interessieren und Sie haben sicherlich ein paar Minuten Zeit dafür. Sie haben gespielt, wo, in welchem...

Wilhelm Furtwängler: In der Großen Oper. In der Großen Oper waren die Konzerte und immerhin das erste Mal nach dem Krieg, dass ein deutsches Orchester, also das Berliner Philharmonische Orchester in Paris konzertiert hat.

Vor dem Krieg und besonders vor der nationalsozialistischen Ära waren wir ja sehr oft in Paris gewesen, fast jedes Jahr und es war nun doch sehr schön, dass diese alten Erinnerungen, an die alten Erinnerungen wieder anzuknüpfen. Das Publikum war außerordentlich liebenswürdig und enthusiastisch und ich glaube auch die Leistungen waren so, dass jedenfalls hat sich jeder vom Orchester bemüht, das Beste zu geben.

BE: Ich bewundere ja, Herr Dr. Furtwängler, Ihren Reiseplan. Sie waren am Anfang des Jahres, wenn ich recht orientiert bin, in Italien, dann in Südamerika, wenn auch allein, nicht mit den Berliner Philharmonikern, und ein paar Worte über London auch sagen, von der Uraufführung der Strauss-Lieder, die schon einige Zeit zurückliegt. Sie war doch sehr international, ein englisches Orchester, ein deutscher Dirigent und eine skandinavische Sängerin.

WF: Ja, Internationalste waren wohl die Lieder selber. Schließlich das Zeugnis, das letzte persönliche Zeugnis von Strauss, auf hervorragend schöne Texte von Hermann Hesse und als Zeugnis des Abschieds von der Welt.

BE: Ja, wir freuen uns, Sie mit den Berliner Philharmonikern zusammen zum ersten Mal im Westen zu sehen.

Vor allem von Tiedemann hatten wir schon eben, als wir auf Sie warteten, einiges erzählt von dem großen Erfolg in der Schweiz, der übererwartend groß gewesen ist.

WF: Ich hoffe nicht übererwarten eigentlich. Erfolge sind so, wie die Leistungen sind. Man bemüht sich, die Leistungen danach einzurichten.

BE: Und jetzt haben Sie die Westdeutschland-Reise vor sich, mit vielen Stationen, jeden Tag in einem anderen Ort.

WF: Ja, das ist bei diesen Reisen immer so.

Trotzdem ist es nicht so anstrengend, als man meint, weil die Orte ziemlich nah beisammen liegen.

(日本語訳)

指揮者ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとのインタビュー
ケルン 1950 年 6 月 6 日
ARD・WDR レトロ — 音声アーカイヴより

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886–1954）は 20 世紀を代表する指揮者の一人である。WDR 記者ベルンハルト・エルンストは、演奏旅行の途上にあつたフルトヴェングラーをケルン中央駅で訪ね、その演奏旅行について話を聞いた。

ベルンハルト・エルンスト（BE）

ケルン中央駅には、誰でも入れるわけではない部屋があります。しかし列車が一時間遅れ、そのうえ大急ぎで移動中で、しかもヴィルヘルム・フルトヴェングラー博士という名前であれば、普通の人には閉ざされているその部屋に入ることも許されるのです。

フルトヴェングラー博士、パリで行われた二つの演奏会についてのご感想をぜひお聞かせいただきたいと思います。少しお時間を頂戴できますでしょうか。
演奏会はどちらで、つまりどの……

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（WF）

オペラ座です。

演奏会はオペラ座で行われました。そして何よりも重要なのは、戦後初めてドイツのオーケストラ、すなわちベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がパリで演奏会を開いたことです。

戦前、とりわけ国家社会主義時代以前には、私たちは非常に頻繁にパリを訪れていました。ほとんど毎年のように訪れていたのです。

ですから、そうした昔の思い出とのつながりを再び取り戻すことができたのは、本当に喜ばしいことでした。

聴衆はきわめて好意的で熱狂的でしたし、演奏についても、少なくともオーケストラの全員が最善を尽くそうと努力したと言えます。

BE

フルトヴェングラー博士、私はあなたの演奏旅行の日程には本当に感心しています。

今年の初めには、私の記憶が正しければイタリアにおられ、その後はベルリン・フィルとではなく一人で南米にも行かれました。

それから、ロンドンで行われたシュトラウス歌曲の初演についても少しお話をうかがわなければなりません。〔原文不鮮明箇所あり〕

あれは実に国際的な催しでした。

新譜頒布のご案内

●ブルックナー作曲 交響曲第8番 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

1949年3月14日 ベルリン ティターニア・パラストでの放送用録音

1949年3月15日 ベルリン ティターニア・パラストでの演奏会ライブ録音

センター会報第60号で「オルセン・ディスコグラフィ」の編纂者として、また世界でも有数のフルトヴェングラー研究家、(旧)デンマーク・フルトヴェングラー協会の創設者・会長として著名な Henning Smidth (ヘニング・スミット 通称オルセン) 氏から、氏のオープンリール・テープコレクションをすべて寄贈いただいたことをお知らせしました。氏にはセンターの草創から Adviser としてセンターの活動を支えて頂いてきていますが、これらの貴重な資料をこれまで以上に十分に整備した複数のテープデッキを使用して収録内容のすべてを引き出すデジタル化をおこない、高品質の CD-R 及びハイレゾ音源として会員の皆様に提供しています。なお、スミット氏のテープには、音質のあまり芳しくないものや、またフルトヴェングラーの全録音をカバーしきれていない部分もありますので、場合によって、既出の SP 盤、LP 盤やセンター自身が保有するテープ・アーカイブからの復刻も併せて行っております。



フルトヴェングラーは生涯にオペラや室内楽も含め 3256 回の演奏会を行いました。そのうち 240 回のコンサートでブルックナーの作品を指揮しています。

今回は第二次大戦後ベルリン・フィルを指揮して行ったブルックナーの**交響曲第8番**の唯一の演奏機会となった、1949年3月14-16日ティターニア・パラストでの定期演奏会から、遺された3月15日のライブ録音（収録は RIAS Rundfunk im amerikanischen Sektor 西ベルリンのアメリカ占領地域放送局）と、その前日3月14日 18:00 から

のコンサート当日に同じくティターニア・パラストで行われた無聴衆の放送録音（収録は Nordwestdeutscher Rundfunk 北西ドイツ放送 - のちに SFB Sender Freies Berlin 自由ベルリン放送に改組）を一括してお聴きいただくこととしました。

3月15日のライブ録音の音源は、会場の雰囲気なども含め臨場感あふれるヘニング・スミット氏の最良のテープの全てをデジタル化、3月14日の録音については、EMI 系の純モノラル LP の世界初出、フランス・パテ(VSM)社の FALP 850-1 のワンオーナー盤をベストの音質で収録することといたしました。なおこの録音については第3-4楽章に3月15日演奏が混

入されているとされ、純粋 3 月 14 日とされる版は Testament の CD でも聴くことができますが、オリジナル・テープの鮮度が良かった時期にプレスされた LP であるパテ盤にもそれなりの価値があると思われますので、優れた音質そのままを CD 化することといたしました。

なお、この LP を正規の 33 1/3 回転で再生した音源および同録音をコピーしたと思われる既発盤 CD 等は、EMI の SACD を除き、なべてピッチが低く、おおよそ $A^4=435\text{Hz}$ となっておりまして、今回の CD 化にあたっては、概ね $A^4=442\sim 443$ となるように修正を試みました。

解説は現在日本の音楽界における若い「ブルックナー・オタク（略してブルオタ）」の一人で、フルトヴェングラーの演奏にも造詣の深い現役のオーケストラ指揮者 坂入健司郎氏にお願いしました。氏は学生時代に日本で発売済のブルックナー交響曲のすべての CD を聴く一方、指揮者となってからは、自らブルックナーやマーラーの交響曲チクルスを指揮する一方、先般センターで頒布したフルトヴェングラー「編曲」のシューマンの交響曲第 4 番を、実際に演奏会で指揮されたことも記憶に新しいところです。

センター版 CD では「伝統」となった演奏会プログラムのファクシミリ版もドイツ・フルトヴェングラー協会のヘルゲ・グリューネヴァルト会長の提供で同封いたします。

WFHC-080/81

フルトヴェングラー指揮 ブルックナーの交響曲第 8 番

(1949 年ベルリンでの演奏 3 月 14 日及び 3 月 15 日)

頒布資料代：CD-R 2 枚組 WFHC-080/81 頒布価格 4,000 円（送料込み）

ご購入いただいた方限定で、192kHz/24bit ハイレゾ・デジタル音源も配信します：

192kHz/24bit デジタル音源（wav）追加価格 2,000 円

1. CDR 製作用原盤の製作にあたっては、「桧山コレクション」で使用してきている Plextor 社製作の CDR 焼成機の銘機「PlexMaster」により、パソコンなどの CDR 焼き込みでは到達できない純度の高い CDR 原盤を作成しています。
2. 頒布用 CDR 製作については、「桧山コレクション」でも使用したプロ仕様のハイスpek CDR を使用し、更に原盤を忠実にコピーする「1：1 オンザフライ」プロセスにより、原盤の音を完全に再現することといたしました。

#####

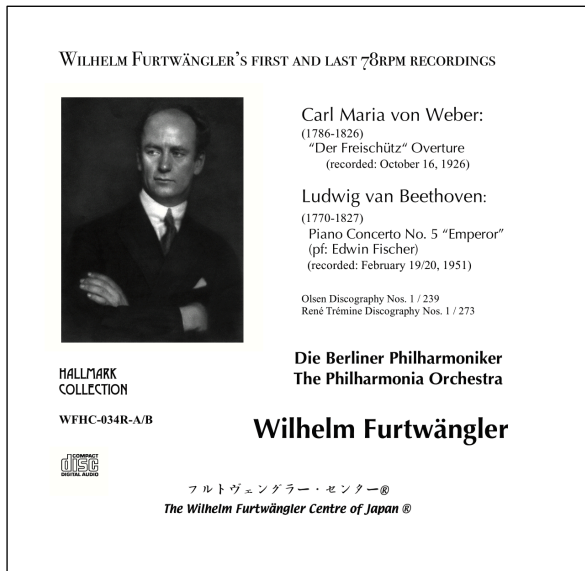
●フルトヴェングラー 最初と最後の SP 録音 CD 版での頒布

この録音は WFHC-034 として 2021 年に 96kHz/24bit 音声で DVD として頒布し、前会報 74 号では 192kHz/24bit のハイレゾ音源のみでの頒布をご案内いたしました。多くの会員の方々

からのご注文を頂いた一方、「間違って購入するところだった、従前通りの CD での頒布はないのか?」「センターは今後配信のみで CD を頒布することはやめたのか?」などのお問い合わせをいただきました。

フルトヴェングラー・センターは CD の制作はやめません!!

今回改めてこの録音を CD 版で頒布することと致しました。



①ヴェーバー作曲 《魔弾の射手》序曲 (1926 年 10 月 16 日、ベルリン)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

②ベートーヴェン作曲 ピアノ協奏曲第 5 番変木長調 作品 73 『皇帝』

(1951 年 2 月 19/20 日、ロンドン)

フィルハーモニア管弦楽団

ピアノ：エトヴィン・フィッシャー

指揮：ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

『皇帝』は、これまでと同様、各面を繋がない版と面繋ぎを施した版、及び米 RCA 版 LP の復刻の計 3 種類を 2 枚組 CD に収録しました。

WFHC-034R-A/B CD-R 2 枚組 頒布価格 3,500 円

#####

桧山コレクション ハイレゾ音源頒布について

センター元相談役・山口勲氏（ペンネーム 桧山浩介）愛蔵のフルトヴェングラーの 78 回転盤レコード（以下 SP）の中から SP をセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するための資料として CD 化・ご提供することとし、2014 年から 2021 年 6 月の第 23 集までシリーズ化しましたが、これらもハイレゾ・ファイルで聴きたい、とする会員の方々のご希望に応える観点から、「**桧山コレクション ハイレゾ音源シリーズ**」と題して、一部音源を差し替えつつ、ハイレゾ・ファイルとして頒布することといたしました。頒布はこれまで通り gigafire 便を使用する予定です。配信用のカバー・スリーブなどは印刷物としてはありませんが、代わりに CD 制作時に使用した印刷用原稿を一部手直しの上 PDF 化して添付いたします。頒布は順不同となる場合があります。

●桧山コレクション 第 23 集

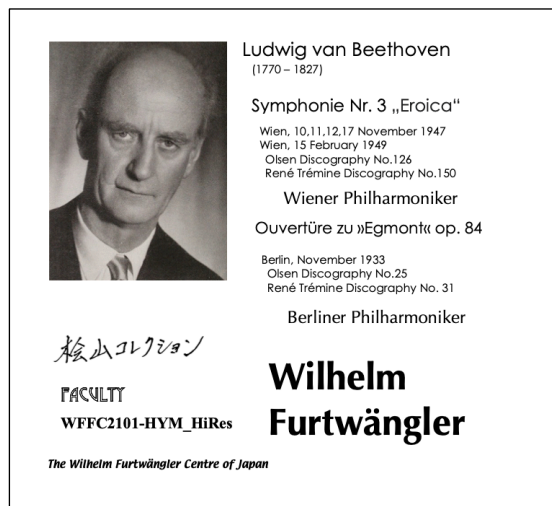
① ベートーヴェン作曲 交響曲第 3 番 《英雄》 1947-11-10 / 11 / 12 / 17

ウィーン・フィル（ウィーン ムジークフェラインザール）

（オーストリア HMV 制作 SP DB6741a~7a、英 HMV DB9300、仏 VSM DB 9296-9302S 混

成復刻)

- ② ベートーヴェン作曲 エグモント序曲 1933-11
ベルリン・フィル (ベルリン ベートーヴェン・ザール)
(仏ポリドール 67055 による復刻)
- ③ ベートーヴェン作曲 交響曲第3番 《英雄》第2楽章 1949-02-15.
ウィーン・フィル (ムジークフェラインザール及びブラームス・ザール)
(オーストリア HMV 制作 SP DB6745a による復刻)



第23集は、松山コレクション第5集(WFFC-1501-HYM_HiRes)と対になる曲集です。センターの第107回レクチャー・コンサートで広瀬大介博士により「エロイカ」を取り上げたのにちなんで、頒布の順番を変えて今回頒布することといたしました。

「エロイカ」については、WFFC-1501-HYM 制作後に取得した、より盤面の状態の良いウィーン・オーストリア盤を中心に、フランス VSM 盤と英 HMV 盤を併用して、すべての面を新たに収録した諸演奏を、各面を繋がない版と各面を繋いだ版の両方を収録し、

WFFC1501 と WFFC2101 の統合版とし、WFFC-1501-HYM_HiRes は頒布を終了いたします。

指揮 : ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

WFFC2101-HYM_HiRes 頒布価格 : 3,000 円

資料申込要領 :

1. 同封の郵便振込票をご利用ください。
2. 申し込み期限は **2026 年 7 月 30 日 (木)** です。これ以降もお申し込みはお受けしますが、原則として受注配信対応を行いますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
3. 頒布資料はセンター会員自身が所有される事を条件に配布しておりますので、オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

頒布予定 : 2026 年 8 月 下旬

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

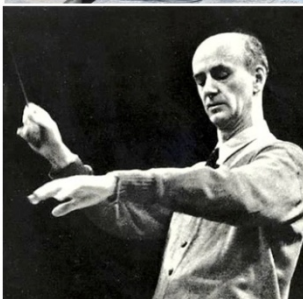
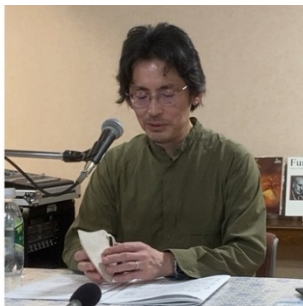
第 107 回レクチャー・コンサート（講師： 広瀬大介 博士）

（2026 年 5 月 10 日(日)開催）

フルトヴェングラー・センター 音響担当理事 中村匠一

5 月 10 日のフルトヴェングラー・センターの第 107 回レクチャー・コンサートは講師に **広瀬大介** 博士をお招きして、「ベートーヴェン交響曲第 3 番『エロイカ』の第 1-2 楽章を深く聴く」というテーマで進められました。これまでの 1 番、2 番の革新性をさらに進めながらも、隔絶した大曲として世に問われた曲なので、必然的に私の感想も長くなります。なので 2 部構成で進めていきたいと思います。本日はその前半から。

もうすっかりお馴染みとなった広瀬さんのアプローチ＝作品自体にも目を向けつつ、フルトヴェングラーがそれをどう扱ったのか？ という点に着目しながら進行していく、という点では第 1 番、第 2 番の時と変わりはないのですが、『エロイカ』はトータルで 50 分前後の演奏時間を要する、当時の交響曲としては「異例」とも言って良い作品規模を持つ大曲だけに、目配りをするべきところが多く、広瀬さんの楽曲解説も一段と力が入ったものになっていました。



音楽史上でこの曲を語る時に、ほぼ絶対と言っていいほど出るのがナポレオンにまつわるエピソードです。当初は『ポナパルト』と題されていたこの曲の表題を、帝位に就いた彼に失望したベートーヴェンが『エロイカ』に書き直したという出来事が、「怒り狂って破り捨てた」と誇張&脚色されてまことしやかに伝え

られるほど有名な話ですが、広瀬さんはそこに、ベートーヴェン自身のバレエ曲である『プロメテウスの創造物』との関連性を見出して語られました。

ギリシャ神話で語られるプロメテウスは「人類に火をもたらし、自然界の猛威や寒さに怯える人々を救おうとし、人類は火を基盤とした文明や技術など多くの恩恵を受けたが、同時に、ゼウスの予言通り、その火を使って武器を作り戦争を始めるに至った事により、プロメテウスはゼウスから罰せられた」という人物ですが、ベートーヴェンは『プロメテウスの創造物』において「民衆に英知を与えた存在」として、彼を描いています。

同時に、生涯、共和主義者としての姿勢を貫いたベートーヴェンにとっては一時期であってもナポレオンが「プロメテウスの」な希望を抱ける存在であった事も無視できません。『プロメテウスの創造物』は、序曲こそ頻繁に演奏される曲ですが、バレエ曲全曲として演奏される機会はずりません。その全曲の名盤を遺したアーノンクールが『エロイカ』を研究し、

「（この交響曲は）民衆の反乱であり、闘いと勝利をあらわしている」と表現したというのは、私には偶然に思えません。

ここまでの経緯からも分かるように、この『エロイカ』という曲は、後にベートーヴェンの音楽を語る上で必ず出てくる言葉＝「絶対音楽」という概念から少し外れています。広瀬さんによると、ベートーヴェンは『エロイカ』を作曲するにあたり『プロメテウスの創造物』の変奏曲を下地に第 4 楽章を作り、そこからさかのぼる形でその前に連なる楽章を作曲していった、ということで、その作曲手法もある意味革新的と言えるでしょう。

では、本題の『エロイカ』第 1 楽章、第 2 楽章において「何が革新的なのか？」を広瀬さんはリストによるピアノ編曲のスコアを用いて、ピアノで実際に主要主題を弾きながら、非常に詳細な説明をしてくださいました。ここでその全容を書くと文字数としても過剰になってしまいますので、楽理にはからっきしの私であっても理解できた要点をかいつまんで箇条書きにしていきたいと思います。まずは第 1 楽章から。

【第 1 楽章】

- ・基本的にはソナタ形式（A-B-A＝提示部-展開部-再現部）の形式に則っている
- ・ハイドンやモーツァルトたちが作り上げたソナタ形式は提示部の 2 つの主題が対比されるというニュアンスだった
- ・だが、ベートーヴェンは『エロイカ』の提示部に 3 つの主題を入れた。色々なメロディを使いすぎると印象が散漫になるリスクもあるが、彼はあえてそのリスクを取り、自分の独自性を貫いた
- ・そんな冒険をしながらも、それぞれの主題はシンプルなメロディを軸に作られている。例えば第 1 主題などは「ミ・ソ・シ」の主和音を順番に辿って上下するだけでつくられている。本来は「変ホ長調」という調性は人智を超えた神聖なものをイメージさせるものだが、あえてシンプルに書くことで、「人としての親しみやすさも備えた」ベートーヴェンの理想とする英雄像を描写している
- ・展開部は前半は従来のソナタ形式にしたがい、（短調への転調はあるが）優しく穏やかな雰囲気包まれている。だが、後半でいきなり誰も聴いたことがない「新主題」を登場させる。英雄の戦いと苦悩が長きにわたったことを音楽で強く印象付けている
- ・再現部で、提示部の「英雄像」が戻ってきたと思いきや、それだけでは収まらず「終結部」を付けて、様々な葛藤を経て、実力をも兼ね備えた「迷いのない英雄像」を描写していてフィナーレとしている

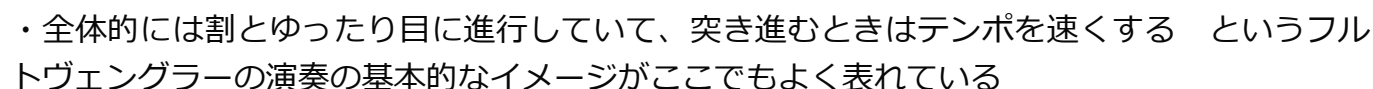
ここからは私の感想ですが、この第 1 楽章だけとってみても、正直、当時の聴衆からしてみると「いつこの曲は終わるんだ！？」という少なからぬ衝撃を受けた事は間違いありません。が、ブルックナーやマーラーのような長大なシンフォニーに慣れてしまった今となっては「一分の隙もない、密度の高い、引き締まった音楽」に聴こえてしまうのがベートーヴェンの凄いところです。この曲が音楽上の「大革命にして大古典」になりえた理由が広瀬さんによる 1 楽章の解説だけでも理解できた気がします。では、続いて第 2 楽章。

【第 2 楽章】

- ・提示部は短いが、ハ短調→変ホ長調→ヘ短調→ハ短調に戻す という転調が施されている。この短い曲の中に人の心が激しく揺れ動く様を描き出している

・だが、長大な終結部では、終わることを惜しむような雰囲気満ちあふれ、最後の方ではベートーヴェン自身がこの曲にやりたいことをすべて詰め込んだ後の疲労感のようなものも感じさせる。ここまでの 2 楽章だけでも一つのストーリーとして、これまでのシンフォニーでは絶対に入りきらなかったことをやっている

それでは、この曲をフルトヴェングラーはどう捉えたのか？そして、広瀬さんがその時代時代の録音を聴かれてどのような印象を持たれたのか？



・ファンファーレのトランペットのトーンが高く、前のめりにも聞こえるが、1944 年という背景を考えれば、この緊張感はある

・この解釈、この録音があまりにも有名であるがゆえに、フルトヴェングラーについてよくも悪くも先入観を持たれるきっかけにもなっているのではないかと

②の感想

・柔らかなサウンドに包まれるような雰囲気になり、各楽器の解像度も上がって、さらにそれが上手くまとまる方向性の演奏でとても心地よい

・フルトヴェングラー的なキャラクターは 1944 年の方が強いが、一方で 1944 年には成しえなかった細部の彫琢が進んでおり、ある意味 VPO との共演として「地続きの演奏」と言えるのではないかと

③の感想

・やはり手兵の BPO との共演ということで、フルトヴェングラーがやりたかったことが一段と見えてきた気がする

・主題と主題を繋ぐところでタメを作り、その後、爆発的にエネルギーを出す というフルトヴェングラーのスタイルがとても良く BPO との調和を見せている

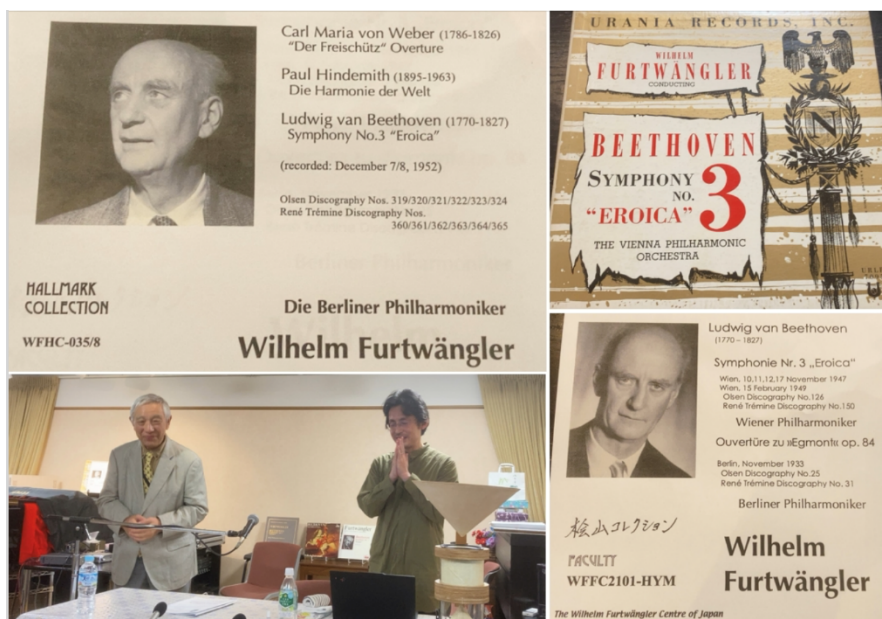
・2 楽章の終結部の非常に細やかなバランスのとり方などは、即興ではなく、主題と主題の関係性がよく練り込まれた演奏で、BPO も彼の意図を汲んで、やりたい事によくついていっている

といった感想でした。私は「戦中のフルトヴェングラーの演奏が特別」だとはあまり思っていない一人なので、広瀬さんの「年月とともにやりたいことがどんどん細部にわたってオーケストラと共有できているのではないかと」という感想に大変共感しました。その上で、私なりの感想を以下に記します。全てがポジティブな感想ではないので、読む方にとっては違和感を覚える方もおられるかもしれませんが、ご寛恕いただければ幸いです。

①の「ウラニアのエロイカ」について

演奏自体の感想については、広瀬さんとほぼ同意見です。そして、1944 年の録音としては鮮度も高く、音割れギリギリのところまでレベルを上げて録っている録音技師も（私は詳細は知りませんがシュナップでしょうか）フルトヴェングラーの音楽の作り方を熟知しているな、という感想です。

が、この「ウラニアのエロイカ」は記録としては貴重かもしれませんが、レコードと言う「製品」としては私はアウトだと思っています。この日も、中村会長が広瀬さんの意見も伺いながら 1 楽章、2 楽章でピッチ



をコントロールして再生していたので、前述のようなサウンドが聴けたのですが、その事を知らない方がこのレコードを手にしたら、フルトヴェングラーの演奏について大きな誤解を生じかねない、そんな 1 枚だと思っています。

このレコードを再生するにあたって必須の条件は 2 つ。しっかりとピッチ修正された復刻盤を聴いておくこと、そして、ピッチコントローラーのあるプレーヤーを使うことです。それがままならない方は、興味本位でウラニア盤やピッチ修正のされていないレコードを手にするべきではないと思います。なぜならフルトヴェングラー自身がチェリビダッケに語ったように、響きとテンポの関連性は彼の音楽の根幹であるからです。

②の HMV の SP 盤について

これも演奏については広瀬さんの感想に付け加えることはありません。シェラックという素材のなせるわざなのか、この音の反応の速さと肉厚な感じは中々他のメディアでは出せないものです。そして復刻も難しい。ただカーブを合わせるとか回転数を合わせるとか、技術的な事だけでは中々上手く行かず、SP 盤の持つジューシーなサウンドから何か肉汁が失われたような音になりがちです。その辺り、復刻担当の清水さんの仕事ぶりは非常に見事なもので、直前に SP 盤そのものの音を聴いた私にも違和感なく聴くことが出来たのは嬉しい体験でした。

ただ、SP 盤の絶対的な制約として尺の問題は避けて通れません。そして、前半に広瀬さんが解説されたように、『エロイカ』のような多様な主題が繋がり、繰り返される曲ではその連続性が音楽そのものに与える影響は少ないものではありません。なので、この SP 盤を運よく手にされ、再生に挑む方も、出来る事ならば復刻盤でそれが繋がった時のイメージを掴んでおく必要があると私は考えます。

少し話は逸れますが、フルトヴェングラーのみならず、クレンペラーやクナッパーツブッシュなどの指揮者が「録りなおし」を極度に嫌ったのは、この SP 盤での体験があるからではないかと思ったりしました。テープと LP という「音楽の連続性」を実現するメディアが出てきたのに、なぜホルナーか所のミスで録りなおしをしなければならないのか？という思いは少なからずあったと思います。そこが録音を「記録」として考えるアーティストと「作品」として考えるレッグやカルショーなどレコード会社のプロデューサーの考え方の違いなのかもしれませんね。

③の BPO とのライブについて

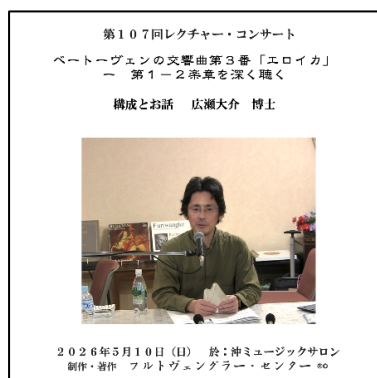
これも広瀬さんとほぼ同じ感想ですが、正直、この演奏、この録音には驚嘆しました。BPO がビューローの時代からペトレンコに至る現在まで、世界のトップクラスのオーケストラとして君臨し続けている理由がこの演奏で分かったような気がしました。特に第 1 楽章の速いパッセージでの上昇下降音階を弾くところで、一糸乱れぬアンサンブルを聴かせてくれるのには凄みすら感じました。録音技師はクレジットされていないようですが、音響的には旧フィルハーモニーに遠く及ばないディタニア・パラストでこれだけの鮮度を保って音を捉えられる録音技師の手腕も称賛に価するものだと思います。

勿論、VPO も世界最高峰のオーケストラの一つなのですが、かつてヴァイオリニストのシュトラッサーが「国立歌劇場と私たちとの不可分の関係が、残念なことに、名声ある指揮者が私たちから去っていく大きな原因ともなっている。ベルリンの人は私たちより恵まれている。」（「栄光のウィーン・フィル」94 頁より）と語ったように、VPO と異なり、常任指揮者との

長い間の関係を築くことが出来たことは BPO にとって圧倒的な強みだったと実感させられる演奏でした。その意味ではこの日聴いた『エロイカ』の中ではこの演奏を一番に推したいです。今回、この 3 枚を聴いて、やはりフルトヴェングラーにとってベートーヴェンは特別な作曲家であり、『エロイカ』もまた特別な交響曲である事を実感しました。続く第 3 楽章、第 4 楽章のレクチャーも心待ちにしたいと思います。講師の広瀬さん、中村会長、薬師寺さんをはじめとしたセンターのメンバーの方々に改めて心から感謝申し上げます。

頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにブルーレイ・ビデオディスクで頒布いたしますのでご利用ください。



引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、講師のお話は音響用マイクロフォンで録音し、鑑賞用再生音源とともに DSD レコーダーで別途収録し、聴きやすさと高音質を追求しています。鑑賞に使用した音源を、収録時間に応じて 96kHz/24 ビット PCM 無圧縮ハイレゾ音源として収録しました。（なお製作はブルーレイに一本化しました。）

さらに当日配布、映写した資料、楽譜などを適宜画面にはめ込み編集して、資料としても大変充実した内容になっています。

WFER2602-BD ¥3,200

申込方法：

1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 一応の申し込み期限は **2026 年 7 月 30 日（木）** です。
3. 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加製作・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
4. このディスクはセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。
5. **発送： 2026 年 8 月以降**

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

#####

センター既発盤についてのご感想

WFHC-076/79 Furtwängler conducts Brahms's Double Concerto in 1949 & 1952

The most interesting works on this quatro CD set is of course the complete recording of the concert of August 24, 1949 in Lucerne. Here we hear for the first time ever the "real" Lucerne Double concerto with Wolfgang Schneiderhan and Enrico Mainardi.

CD 1-2: The whole concert was recorded on acetate discs directly from the broadcast. In quiet passages the sound is marred by clicks and other surface noise, nevertheless we must be happy for having at last this important concert available. After the Double concerto we hear Till Eulenspiegels lustige Streiche by Richard Strauss – this is the only Furtwängler performance of that work played by the Festival Orchestra of Lucerne. The concert concluded with Tchaikowsky's 4th symphony in F minor opus 36. That performance is much more vivid than the HMV studio recording from 1951.

The first CD begins with what has hitherto been considered the "1949 Lucerne Double concerto" with the distortion in the end of the first movement. That performance is well-known among Furtwängler collectors. According to Japanese specialists it is almost certain that we hear the Vienna Philharmonic performance of January 26, 1952 with soloists Willi Boskovsky and Emanuel Brabec.

CD 3-4: Here we listen to the performance of January 27, 1952 Wilhelm Furtwängler conducting an all Brahms concert with the Vienna Philharmonic Orchestra: Double concerto with soloists Willi Boskovsky and Emanuel Brabec, Haydn variations, and 1st symphony.

The whole concert is splendidly recorded by the Radio RAVAG. The Double concerto is undoubtedly the best recorded version we have by Furtwängler. The performances of the Haydn variations and the 1st symphony are "classical" Furtwängler performances, less dramatic than the Berlin performances and very beautiful played by the orchestra. Years ago the whole concert was published by EMI on LP and CD. These CDs present an un-doctored version of the original recordings.

Do notice the important article of *Atsuya Funaki* on The structure of the Double concerto and Furtwängler's interpretation in the booklet.

The value of this set: It combines all three known performances of the Double concerto by Furtwängler, and presents for the first time ever the whole concert of August 24, 1949 in Lucerne – despite the fairly bad sound the musical value is an important addition to the Furtwängler discography.

Henning Smidth
May 14, 2026

(日本語訳)

WFHC-076/79 フルトヴェングラー指揮 ブラームス《二重協奏曲》1949 年および 1952 年

ヘニング・スミット

5月14日

この4枚組CDセットでもっとも注目すべき内容は、いうまでもなく1949年8月24日のルツェルン公演の完全録音である。ここに収められたヴォルフガング・シュナイダーハンとエンリコ・マイナルディによる《二重協奏曲》によって、真の意味での「ルツェルンの《二重協奏曲》」が初めて全貌を現した。

CD 1-2：演奏会全体は放送音源から直接アセテート盤に収録された。静かな箇所ではクリック音やその他の盤面雑音による障害が少なくないものの、この重要な演奏会がようやく全曲の形で聴けるようになった意義は大きい。《二重協奏曲》に続いて収録されているのはリヒャルト・シュトラウスの《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》である。これはルツェルン祝祭管弦楽団による同作品の唯一のフルトヴェングラー演奏として知られる。演奏会の最後を飾るのはチャイコフスキーの交響曲第4番へ短調作品36であり、その演奏は1951年のHMVスタジオ録音に比べてはるかに生命力に富んでいる。

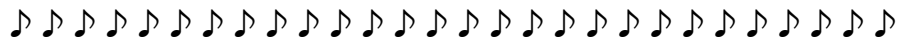
第1枚目のCDは、これまで「1949年ルツェルン《二重協奏曲》」として知られてきた演奏で始まる。第1楽章終結部に歪みを伴うこの演奏は、フルトヴェングラー蒐集家にはよく知られたものである。日本の研究者たちによれば、これは独奏者ヴィリー・ボスコフスキーとエマヌエル・ブラベッツを迎えた1952年1月26日のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団との演奏であることがほぼ確実とされている。

CD 3-4：ここには1952年1月27日に行われたオール・ブラームス・プログラムが収められている。ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、独奏者ヴィリー・ボスコフスキーとエマヌエル・ブラベッツによる《二重協奏曲》をはじめ、《ハイドンの主題による変奏曲》、そして交響曲第1番が演奏されている。

演奏会全体はRAVAG放送によって見事な音質で記録されている。《二重協奏曲》は疑いなく、フルトヴェングラーによる同作品の録音のなかで最高の録音条件に恵まれたものである。《ハイドンの主題による変奏曲》と交響曲第1番は、ベルリンでの演奏ほど劇的ではないものの、「古典的」フルトヴェングラー様式を示す好例であり、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団もきわめて美しい演奏を聴かせている。演奏会全体はかつてEMIからLPおよびCDとして発売されたが、本CDでは原録音を加工することなく収録している。

ブックレットには、船木篤也氏による《二重協奏曲》の構造とフルトヴェングラーの解釈に関する重要な論考が掲載されている。ぜひ参照されたい。

このセットの価値は、フルトヴェングラーによる既知の《二重協奏曲》全3種の演奏を一つに集成した点にある。さらに、1949年8月24日のルツェルン公演全体を初めて公開したことも大きな意義を持つ。音質面では相応の制約を免れないものの、その音楽的価値はきわめて高く、フルトヴェングラーのディスコグラフィに新たな重要資料を加えるものである。



林 伸司 (Shin-P) 氏

(前略)

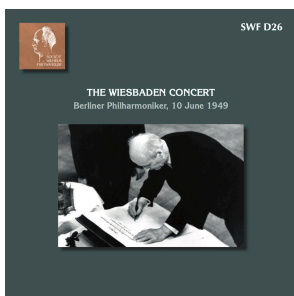
これまで 49 年ルツェルンとされたドッペルは聞き込めば 52 年ウィーンと酷似しており、3 日間の別の日と感じました。52 年 1 月 27 日録音とされる EMI 盤は 公式にソ連軍占領下の RAVAG が収録したとしており、別の日に米軍の RWR が収録したもので幾多の変遷を経て傷んだ音源になったのではと想像されます。

さて今回の新発見録音ですが、生中継をアセテート盤にカッティングした音質が、3 曲共に共通しており真正 49 年ルツェルンであることはまちがいないと思います。

演奏については、2 種のウィーン盤(と現在されるもの)と比べるとまろやかな印象を持ちました。どれが好きかと問われれば 現在では偽ルツェルン盤となってしまった演奏がいちばん迫力が感じられて好ましく思いました。(後略)



フランス・フルトヴェングラー協会の新譜（配信のみ）について



SWF D26

ヴィースバーデンでのフルトヴェングラー(1949 年 6 月 10 日収録)

プフツナー：『パレストリーナ』から 3 つの前奏曲

モーツァルト：交響曲第 40 番

ブラームス：交響曲第 4 番

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

フランス協会制作の 192-24 及び 44-16 デジタル・ファイル

(フランス協会会員限定頒布) 価格：15 ユーロ

(支払いは銀行振込又は Paypal)

第 108 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時：2026年7月12日（日）

開演 午後1時00分開演 終了 午後6時ころ

「ベートーヴェンの交響曲第3番《エロイカ》第3-4楽章と全体を深く味わう」

講師 広瀬大介博士

第 109 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時：2026年8月23日（日）

開演 午後1時00分開演 終了 午後6時ころ

「シューマンの交響曲第4番『フルトヴェングラー版』を指揮して」

講師 坂入健司郎

○参加費：

センター会員1000円、（非会員2500円）

○会 場：沖ミュージック・サロン 東京都文京区千石1-17-6

Tel 03-3943-5128

最寄駅：都営地下鉄三田線 千石下車、JR山手線 巣鴨下車

○お問い合わせ、予約：

電話またはEメールで下記まで。会場設営の都合上、ご出席の場合は必ず予約をお願いいたします。ご予約の際は懇親会の出欠についても必ずお知らせください。キャンセルは前日までにお願いいたします。

Tel：080-6603-3444

（電話でのお問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いいたします）

Eメール：info@furt-centre.com

終了後、講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は別途2,000円程度です。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょう？

《お願い・お断り》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。

◎銀行振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！

センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。

◎海外協会のCD等につきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいておりまして、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないようなケースその他の損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦ください。

◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。

◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



1951年 ティターニア・パラスト

編集・発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東 2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士

名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン、パーヴォ・ヤルヴィ、ヘルゲ・グリュネヴァルト

アドバイザー：ヘニング・スミット（通称 オルセン）

理事・会長：中村政行 理事：市川悠一、大橋陽一郎、津野宏、薬師寺純平、呼川秀邦、中村匠一（音響担当）、宮嶋大貴

監事：鹿内浩胤 チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドバイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-6603-3444

ゆうちょ銀行振込口座 00240-9-111630

ゆうちょ銀行以外からの振込先：

（口座名義）フルトヴェングラー・センター

【店名】〇二九（読み ゼロニキュウ）【店番】029 【預金種類】当座【口座番号】0111630

E-mail : info@furt-centre.com URL : <http://www.furt-centre.com>